

市民広聴会「まちづくりほっとミーティング(第7回)」

会議録(概要)

<テーマ> 何が必要? 防犯対策

日時	令和4年1月30日(日) 10時~11時30分
会場	東部地域交流センター・むらさきかん
出席者	参加者(公募)10名、市長

1. 市長あいさつ・広聴会の趣旨説明【市長】

・犯罪から市民を守ることは基本中の基本である。貴重なご意見やアイデアを承ることができるのではないかと期待している。

2. 今回のテーマについての説明【市長】

・岡崎市は1月8日に議会と連名で、「子ども・女性・高齢者を犯罪から守るまち岡崎」という都市宣言を表明させていただいた。犯罪のターゲットになりやすい方々をしっかりと守らなければならない。犯罪件数自体は減少傾向ではあるものの、陰湿化・深刻化しているという現状は認識している。行政、議会、警察、地域の皆さまとで一丸となって犯罪を防ぐ必要がある。

・市としての対策を取りまとめる計画策定も進めているが、すぐにでもやらなければならないこともある。また、行政ではなかなか気付かない、手が届かない部分もあると思う。市民一人ひとりができる防犯対策や地域としての必要な取り組みについて、皆さまからアドバイスいただければありがたい。

3. 参加者のテーマに関する意見表明

【参加者A】

・岡崎市東部は山ばかりで、ポツンと一軒家もあれば十数軒の住宅が集まる場所もあるというのが特徴だ。また、市内東部は幹線道路が大体1本である。

・防犯において二つのポイントを考えている。一つは、防犯カメラや防壁を含めたハード面。もう一つは、一人ひとりの防犯に対する意識の向上を図っていくというソフト面だ。

・その二つとも歴史から学ぶことができるのではないだろうか。以前から起きている犯罪について、歴史から学ぶことが大切ではないかと思い、今日は勉強させていただきたい。

【参加者B】

・子を持つ主婦としては、「防犯カメラ設置」のプレートや防犯カメラが設置されているのを見て、岡崎市に住んでいて良かったと思う。防犯カメラがある道を通ろうと意識するし、犯行を防ぐ効果もあるのではないだろうか。

・防犯カメラが設置されていても、街路灯がついておらず暗い通学路がある。冬になれば日が暮れるのが早くなるので、子どもたちが通って何かあった場合、こんなに暗くて本当に画像は見えるのだろうかと思ってしまう。防犯カメラだけではなく街路灯も設置する必要があると感じる。

・自身も若い頃から防犯ブザーを身に付けており、子どもたちにも防犯ブザーを必ず持たせようと考えている。自分で身を守ることも大事ではないか。私自身、防犯への意識を高めるために、市から配信される防犯情報メールマガジンや「アイチポリス」というアプリを活用している。

・今はオレオレ詐欺などの被害も耳にするが、高齢者のかたがしっかり貯めていたお金をだまし取るのは本当に許せない。情報を知っていても、それを高齢者のかたにどうやって伝えたいのか。主婦として、子を持つ親として、孫として、何かできることはないか、皆さんと意見交換がしたい。

【参加者C】

・大学4年生です。岡崎市は全国的に見ても犯罪発生率が高い。今回のミーティングは改めて防犯について考え直す良い機会だと思う。女性や子どもなど、立場の弱いかたが安全に暮らせる市になってほしい。

【参加者D】

・警備の仕事をしている。防犯については常日頃考えているが、やはり岡崎の犯罪件数はとても多く感じる。防犯対策について、真剣に考えなければいけない時期である。防犯について、みんなに興味を持っていただける会になればと思い参加した。

【参加者E】

・大学4年生です。犯罪者をゼロにすることは難しいため、自身を守ることが大切だと考えている。特に女性は男性より犯罪に遭う危険性が高いが、多くの人が自分は大丈夫だと思っ込んでいます。

・防犯グッズも女性が持ちやすいネックレス型の笛やパスケースについている防犯ブザーなどがたくさんある。まずは、そのような情報を発信していくことも一つの方法ではないだろうか。今回のミーティングを通して、私自身も犯罪対策について学びたい。

【参加者F】

・大学3年生で、小学校教育と幼児教育を学んでいる。これから現場に出て、子どもたちに防犯指導をする場面もあるだろう。今日は子ども目線、また自身が女子大生として岡崎に住んでいて考えることを意見交換したい。

【参加者G】

・高校1年生です。侵入盗の防犯対策については、個人の小さな取り組みが大事だと思っている。具体的には、短時間外出するときの施錠、夜間パトロール、青色防犯パトロールなど、日頃からの地域住民の協力とボランティア支援が防犯の大きな力になる。

・現代はスマホを使った詐欺が発生しており、特に子どもたちが巻き込まれるケースが多い。周りの大人からスマホ詐欺が巧妙になっていることを教えることが必要である。

【参加者H】

・海外生活や日本でも6つの町に住んだ経験があり、約11年前に岡崎に戻ってきた。
・岡崎は触れ合いの町だと思い帰ってきたが、45年前に岡崎を離れたときより人口が多くなり、昔のような懐かしさ、心の触れ合いはないように感じる。もっと明るくきれいに整理されたまちづくりを行えば、防犯対策になるのではないか。

・昔に比べれば省電力化が進んでいるので、もっと街灯を設置し明るくて、きれいなまちづくりをしてほしい。本当にここは歩道なのかと思うほど、ごみが落ちている場所も見受けられる。ドイツは非常にきれいな町であった。そのような経験から、参考になる話をしようと思う。

【参加者I】

・私の住んでいる地域では、過去に連続放火事件と強盗殺人事件が起きた。当時、犯人が捕まるまで何度も放火が起き、消防団員だった私は、昼夜を問わず消火活動に当たっていた。住民もいつも不安な思いをして過ごしたのではないか。

・同時期に私の家の近くで強盗殺人事件が起き、地域住民は、非常に不安な思いをされてきたのではないかと感じる。犯人は、まだ捕まっていないので、そのことを思い出し、今でも不安になるかたもいらっしゃるのでは。放火犯は防犯カメラに映った映像が決め手となり捕まった。岡崎市にもたくさんの防犯カメラが設置されているので、その点は安心かと思う。

・現在はコロナ禍で消防団の活動を休止しているが、地元ではジョグパトロール隊といって、夜にタスキを付けて走る活動に参加している。ただ、タスキがゴワゴワして走り辛いので、走るのに適したビブスなどがあると、防犯パトロールしながら走るかたが増えるのではないかと考えている。

【参加者J】

・長年、岡崎警察署、市と一緒に防犯の啓発活動を行ってきた。私自身も高齢者となり、コロナ禍では今までと同じようには活動できない。できることからやっていて、今は警察署から提供される情報をまとめて、子どもから大人まで多くのかたが通る自宅の前に掲示している。

・岡崎市は夜が暗い。道が狭く急な坂道を上がったところに自宅があるので、車のすれ違いがしやすいように、長年、水銀灯を設置して少しでも道が明るくなるように工夫している。多くのかたが暗い道を散歩しているが、靴に反射シールを貼るなど個人でもできることも考えたい。また、もう少し明るい町になると犯罪も減るのではないだろうか。

4. 意見交換

【犯罪件数について】

市長

・10人の参加者から、素晴らしいご提言をいただいた。岡崎は犯罪の発生が多いということだが、いわゆる警察が確認している犯罪認知件数では統計上は減っている。しかし、実感として犯罪が多い町だというイメージがあるとしたら何が理由だろうか。

・特殊詐欺は市が特に減らしたい犯罪である。テレビや警察署で、還付金詐欺、電子マネー詐欺など高齢者に対する特殊詐欺防止の啓発を頻繁に行っているけどもたまされてしまう。どのように防ぐことができるか、何かいいアイデアはないだろうか。

【参加者C】

・犯罪は減少しているが、私は自転車2台の盗難、最近ではバイクに窃盗団からと思われるチラシが付けられるなど、犯罪を身近に感じる。自分自身が犯罪被害に遭っているのに、犯罪件数が多いと感じる。

・さらに岡崎は窃盗や放火がとても多いと伺っていたので、減少傾向にはありつつも全国的に見てまだまだ犯罪は多いのではないかと。

【参加者I】

・データとして多いかどうかは分からないが、矢作地区では、この10年で私が知っているだけで2件の連続放火があったので多いのかもしれない。

【参加者D】

・犯罪件数に関する資料がないか気になって、市のホームページで防犯活動について調べた。平成30年までの犯罪件数の推移で、27年から30年にかけて下がってはいるが、まだ侵入盗は多いと載っていた。新しい資料がないので、改善してほしい。

・ただ数字の羅列をするだけでなく、皆さんに興味を持ってもらえる内容にして、防犯に興味を持つように工夫する必要があるのではないかと。これからの岡崎のまちづくりをどうするかという話だが、考えるには新しいデータが必要だ。

【参加者J】

・毎月、岡崎警察署から各学区で発生したさまざまな犯罪の情報が届く。その情報を多くのかたが知り、町内で起きている犯罪を把握し、どんなことに気を付けなければならないかを意識づけるなど、啓発に利用できると良いと思っている。

【参加者H】

・市として、市民のかたにも同じような気持ちを持っていただけるような、見える化が足りないのではないだろうか。

・特殊詐欺に遭う前に高齢者が気軽に相談できるような心が触れ合うまちづくりを、進めていくことが防犯対策にもなる。触れ合うためには見える化、明るいまちづくりを進めていくのが、これからのまちづくりで大切なことだと感じる。

【防犯対策のための情報収集について】

【参加者G】

・友達と防犯に関する話が上がることはない。羽根学区は犯罪が多く、中学校の校内放送で不審者情報が流れていた。先生方が子どもたちに指導するのも防犯対策の一つかと思う。

【参加者F】

・大学内のポータルサイトでは不審者情報の共有が行われている。岡崎は場所によって人通りの多い少ないがあるが、私の大学は駅から自転車で通う生徒が多く、細い道を通って通う学生もいる。私自身も時間がないときは近道を使ったり、早く帰りたいときは細い道を通ったりしてしまうことがある。街灯が少ない道は怖いので友達と一緒に帰るようにしている。暗いと感じるスポットもあるし、子どもたちに通ってほしくないと感じる道もある。

・岡崎市にはハザードマップがあるのに、防犯マップがあまりないのはなぜだろう。私には歳の離れた弟がいる。私が子どもの頃は公園で日が暮れるまで遊べたが、今の子どもたちは防犯ブザーを持たないと子どもだけでは遊べない。防犯に対する地域の意識が薄いかと思う。保護者、子どもたち、教員など地域の目をどこに向けるのか、防犯マップを作ることで犯罪が起こる場所の見える化が進むかと思う。

・情報共有にはSNSやアプリを使うことが多いので、そのようなデジタルでの情報発信も岡崎の強みにすると良いのではないかな。

【参加者B】

・SNSも使用するし、アイチポリスというアプリからも情報を得ている。また、インターネットで岡崎市の犯罪情勢を調べることができる。日頃から検索していると検索結果に表示されやすくなるので、気づいたときはインターネットも活用している。

・SNSをどうやって広めていくか。岡崎市は情報に強いイメージがある。PayPayも非常に普及しているので市民もデジタルに強いのではないかなと思う。ぜひ、SNSを活用し、若者から高齢者まで情報を発信してほしい。

・防犯に対する意識を高めるためには、まず知ることが大事だと思うので、楽しく防犯を学ぶ機会を市民に与えてほしい。すすすすメールもたくさんのお母さんが登録していると聞くので、リンクで情報に飛べるようにしていただくと、お母さん世代にも発信できるのではないかなと思う。

【参加者A】

・私はまず情報が最も大切ではないかと思う。人口に応じて犯罪は多くなっている。街と田舎の何が違うかという、結局は地域のコミュニティーの力だ。犯罪をどう減らすかは、最終的には地域住民一人ひとりの意識を高めることに懸かっている。そのためには、さまざまな情報が流れることが重要だ。

・ソフト面においても、情報が最も大事だろう。犯罪が起き防犯カメラを見る場合には、警察から管理者に要請する必要があるが、その犯罪の詳細は知らされない。総代会などを通して情報を流していただくと、すぐに回覧を回すこともできる。いかに早く注意喚起するかが大事ではないだろうか。最終的には地域のコミュニティーの力がものを言う。それに対して、どのようにアプローチしていくかに力を注ぐべきである。

【高齢者を狙った詐欺への対策】

【参加者J】

・息子さんから「お金が要る」と言われて貯金を下ろしてきたと友達から聞いて、慌てて警察に相談し、詐欺だと気付いたことがあった。行動に移す前に相談することがなかなかできない。実際に私のもとにもオレオレ詐欺の電話が何度か来た。街中に住んでいるかたは比較的、周りに相談せずにお金を下す傾向があるので、犯人は地図を見て電話をかける」と警察から聞いた。このように身近でも特殊詐欺の話聞いて驚いた。

【参加者B】

・特殊詐欺のような犯罪があることを知らないと、だまされてしまうと思う。いかに高齢者に、こういう手口の犯罪があると知ってもらうかが大事である。確かに、市役所のホームページにも犯罪についての情報は載っているが、情報が古い。今はコロナ禍で広めにくいとは思いますが、コロナワクチン接種を待つ15分の間など、少しでもアナウンスして理解を求める場所にはどうか。整体・病院・銀行など、高齢者の目に入るような方法で特殊詐欺の手口を知る機会を作してほしい。

・特殊詐欺を知らないかた、知ろうとしていないかたが被害に遭ってしまう。防犯について学ぼうとする意識を変える必要がある。身近な目に入る場所に情報があることで被害が減っていくのではないか。

【参加者C】

・特殊詐欺に遭いやすい人の特徴の一つとして「断れない人」が多い。また、詐欺に遭わないと思っている人たちは自分から情報を積極的に取り入れようとしない傾向があり、詐欺に遭わない人ほど自分から積極的に調べている。まずは意識しなくても詐欺に対する情報が入ってくる環境をつくり、何気なく見たテレビのニュースで知ったぐらいの感覚で情報を得られるように体制を整えればいいのか。

・人を疑わない、善意につけ込む犯罪も多い。どうしても人を疑うと言うと悪意があるように感じてしまうが、自分を守るためにも知らない人や普段関わらない人から電話がかかってきた場合、まずは一度、疑う。相手の所属やどのような人かを、まずは聞き出すことが大事ではないか。

【参加者 I】

・特殊詐欺は、ほとんど電話から始まる。まず電話に出ない癖をつけることが、最も大切かと思う。最近では特殊詐欺の対策装置が売られているので、そういうものを買って設置してもらった方がいいだろう。その装置を買うときには市の補助金も利用できる。そういうこともしっかりとPRしていただきたい。

・振り込め詐欺では、ほとんどのかたが電話をしながらATMを操作すると思う。周りの人が気づいて近くの店員に声を掛けられるように、「そのような人を見たらすぐ店員に伝えてほしい」というPOPを掲示するなど、被害を未然に防ぐような発信があると良い。

【参加者 A】

・特殊詐欺は、人口の少ない地域でも発生している。その代わり、遭った場合にはすぐに通報が入る。一番問題になるのは個人情報だ。個人情報だから開示できないと、警察から情報を得られなかったこともあった。だから、どのようにバランスを取っていくのかが大きな課題として残るのではないかと思う。

・東部で「押し買い」という事件があった。宝石類を買うとあって各家庭を回ってくる。あるご家庭では高齢者お一人だったので、怖くてどうにもできずお金を出して引き取ってもらったということも聞いた。

・福祉委員会が各学区にあると思う。福祉委員会で一人暮らしや高齢者世帯をどのように守っていくかを考えた。そこで、ボタンを押すことでサイレンの鳴る器具を自作し、高齢独居世帯に設置していただいている。風呂場、居間、携帯用と三つ用意し、それを押していただくことで身を守っていけるようにしている。これを取り付ける場合には、いざという時にどのように連絡を取って、どのように対応するかを必ず近所のかたと話している。器具を設置するだけでは緊急時には対応できない。お隣組長さんなど最小限のコミュニティーで決めておけば、解決できるかと思う。

【参加者 G】

・自身の祖父祖母にも特殊詐欺の情報を共有したいと思う。

市長

・家族が交通事故に遭ったと高齢者のもとに電話するなど、家族が詐欺の材料となってしまうこともある。電話のときは最初に名前をちゃんと言うなど、ご家族の間で決め事しておくといいのかもしれない。

【参加者 E】

・私は祖父母と同居している。近くで犯罪があったときには、開示されていた情報を全て祖父母に伝えた。今でも固定電話で生活しているので、このような話は気を付けて、一度相談してねという話はしっかりとした。

【性犯罪・性暴力への対策】

市長

・恐らく、性犯罪は統計に表れている以上に発生していると思う。痴漢、ネット上の嫌がらせなど、あらゆることを含めて、そのような犯罪を減らしていくためにはどうしていくべきか、ご意見をいただきたい。

【参加者 B】

・小学生のとき「校長先生が呼んでいるから学校まで案内して」と誘拐されそうになったが、友達と一緒に逃げ、事なきを得た。大人になってからも、痴漢、露出狂などに遭遇したことがある。今は大人になったからこそ発言できるが、実際に犯罪に遭った時には親にも言えなかった。満員電車では逃げ場がなく、もしかしたら自分の勘違いでこの人の人生を終わらせてしまうかもしれないと思うと告発もできない。本当に切実な問題だ。

・防犯ブザーを持てば、防犯意識があることを相手に知らせることができる。今は逆に目立たない防犯ブザーが流行っており、恥ずかしいからおしゃれな防犯ブザーを持ちたいという女性の心理はあると思うが、いかに犯罪に遭いにくいようにするかが大切である。露出をしていないからといって痴漢に遭わないわけではないが、なるべく露出を控えることもできる。

・アイチポリスのアプリでは、防犯ブザーを鳴らしたり、画面表示で痴漢を知らせたりすることができ、もし勇気がなく言えないときでも、画面を誰かに見せて言ってもらうこともできる。被害に遭っているときは、声を出すこともできない。そういうものがあることを皆さんに知っていただきたい。

【参加者 F】

・女子大は男の人からのつきまといや声掛けが多いので、みんなでまとまって帰るようにしている。

【子どもを狙った犯罪への対策】

【参加者 B】

・私たちの身近に1人で遊んでいる子はいない。大人の私が小さい子を連れていくと、小学生の子も安心して一緒に遊ぶこともある。今までは、当たり前のように地域の中であいさつをしていたが、最近は声を掛けると怪しまれてしまう。地域のコミュニティーで子ども

たちが安心して遊べるようになってほしい。

・公園の周りに樹木が生い茂っていると中が見えないので、子どもたちが何か被害に遭っても知ることができない。私たちの学区では、木の剪定などを高齢者のかたが行ってくださっている。さらにごみが多いところで子どもたちが遊ぶのは怖い。きれいになることで犯罪を抑止しながら、見えるところで遊ばせてあげることが大事だと思う。

【デジタルの活用】

【参加者D】

・岡崎市には1,000台近くの防犯カメラが設置されているそうだが、活用されていないと感じる。犯罪捜査には活用されているが、ほとんどは撮りっぱなしで防犯という意味での効果はいまひとつである。

・人が監視すると情報漏えいの危険や個人情報の問題もある。それに比べて、AIに24時間体制で監視させれば人件費も発生しない。その情報を基に地域の消防団や防犯ボランティアへ繋ぎ、声掛けをしてもらい、重大事案であれば警察への通報など迅速に対応できれば犯罪は抑止できるのではないだろうか。AIが「煙が出ている」と判断すれば、火災にも対応できる。AIの開発は必要だが、実行すれば市民が安心して暮らせるモデル都市になることができるのでは。

【参加者C】

・犯罪を行おうとする人は、周辺を警戒して下見をするので、まず防犯カメラがあること自体が抑止力になる。ダミーであればコスト的にも抑えられるし、見ただけでは本物かダミーかは分からない。データを活用していくことに加えて、ダミーによって数を増やすことも、より防犯に繋がるのではないだろうか。

【地域のコミュニティ】

【参加者H】

・隣の人の様子を知ることこそ防犯対策になるし、特殊詐欺に遭った際にも相談し合える。そのためには人と人との触れ合いができる、きっかけづくりをすることが重要だと思う。隣の庭を見て、今日は良い花が咲いているねと、お互いに話し掛けられるような関係を作っていきたい。

・ごみの問題に関して言えば、軽量化している町は人口10万人以上の都市だと約45%、5万人以下だと約75%である。人口が多くなるほど軽量化されていないようだ。5S運動に携わってきたが、市でも日本一美しいまちになるんだという気持ちで推進していただきたい。

【参加者J】

・私の住んでいる町の活動を報告したい。10年ほど前にひったくりに遭い転んでけがをして入院されたかたがいたことをきっかけに、町内の有志が5時半～6時半まで町内を見回っ

ている。それによって、ひったくりや自転車泥棒などの犯罪が減り、とても喜ばしい。

・残念なことに、コロナ禍になり見回りは中止、さらに高齢者が増えたため次に繋ぐ人がいない。週2回でも各町内を回ることによって、犯罪の抑止になる。人づくり、コミュニティーづくりを進め、自分たちでまちを守るんだという気持ちを持つ方々が増えると良いと思う。

【ハード面の対策】

【参加者A】

・藤沢市では「100年続く街」を目指して、人の動線に街灯を設置し2～3歩前を照らすような取り組みが行われている。同様に岡崎でも街灯を設置して、少しでも犯罪を縮小していければ良い。

・公衆電話ボックスを利用して、緊急のときにはボックスの中に入り鍵をかけると安全が守られる。さらに自動的に警察に通報が行く。フリーWi-Fiの基地をつくり、どこからでも連絡ができるようにするなど、デジタル技術を活用すべき。

【参加者I】

・消防団で月2回ほど見回りをする。人口が多いところは明るいけど、やはり田舎に行けば暗くなる。私が住んでいる地域には駅があれば田んぼもあるので、人口に応じてそれぞれ対策を考えてほしいと感じている。

5. 総括

市長

・さまざまなアイデアが出され、非常に有意義な時間だったと思う。市の情報発信はしっかり点検して、最新のものへのアップデートが必要である。防犯ブザー・サイレンは火災報知器のように注意喚起となる。犯罪が起きやすい公園などに設置するのは一つの手だと思った。街路灯や防犯カメラを増やすことも有効だ。

・日々の交通事故件数を駅前・市役所前などで表示することで安全意識が高まってきたならば、犯罪についても同じことが言えるかもしれない。専門のポータルサイトを市として作成し、アイチポリスなど有効なツールを広めることも大切だ。ゲーム感覚で防犯を学んだり、子どもたちにポスターを作ってもらったり、出されたアイデアをWebページで紹介し横展開していくこともできる。

【司会】

・今回の内容については、後日ホームページなどで広く周知することで皆さんに市政への関心を高めていただき、より良いまちづくりへ繋げていく。

(了)